
認知症診療・ケアにおける 認知症カフェの役割

The role of dementia cafe in the medical practice and care of dementia

藤田保健衛生大学医学部 認知症・高齢診療科/教授

武地 一*

はじめに

人はだれしも自分の持った病気と、みずから向き合っているとする。しかし、認知症については、一人で背負うことは難しく、個人を超えて家族、地域、社会という形で、ともに向き合っていくことになる。室伏がかつて喝破したように認知症高齢者の生きがいとはなじみの関係の中にあり、「このなじみの関係の、最短距離で自然な姿というものは、いうまでもなく原則的には家族である。」¹⁾長年、ともに暮らして共有している数多くのものがあるからである。しかし、反対にエスピン・アンデルセンが説くように、介護を家族だけで担うことは、家族の絆をむしろ弱めてしまう²⁾。つまり、認知症という長期的に向き合う疾患とつきあっていく中で、人生の時を長期間共有した家族を中心とした関係と、社会的な理解や支援の均衡が重要である。

認知症施策と認知症カフェ

認知症という疾患が個人、家族、社会にもたらす甚大とも言える大きな影響と、超高齢社会における認知症の人の数の増加という2つの因子の重なりから、必然的に国としての総合的な施策が求められてきた。2000年に施行された介護保険制度を一つの端緒とし、2012年には厚労省が「今後の認知症施策の方向性について」を示し、2015年1月、国家戦略としての「認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)」³⁾が示された。認知症と共にできるだけ長期間なじみの家族や地域の人びとと共に暮らしていくため早期からの道筋をより良い形で歩んでいけるよう認知症ケアパスという道筋を整える作業が推進されることになった。2018年度か

らはすべての市町村で実施されることになる「認知症初期集中支援チーム」の設置や、2016年度から開始された身体合併症を有する認知症の人の入院加療などの環境を整えるための認知症ケア加算開始と認知症ケアチームの発足、地域の中で、認知症ケアや認知症理解・啓発の拠点となる認知症カフェの設置など、多方面にわたる認知症施策が走り出した。

認知症カフェの位置づけ

それらの中で、本論では、認知症カフェに焦点を当てて、認知症診療・ケアにおけるその位置づけを考えてみる。あらためて、その目で新オレンジプランの7つの柱を見てみると、そのうちの3つ、すなわち、②「認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供」、④「認知症の人の介護者への支援」、⑦「認知症の人やその家族の視点の重視」において、認知症カフェについての言及がある(図1)。また、直接的には記載はないものの、①「認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進」の中には、認知症サポーターの学びや活動の場としての認知症カフェを想像させる記述があり、③「若年性認知症施策の強化」についても、若年性認知症の人の活動の場としての認知症カフェの実践例もみられることを考えると、鍵となることが想像される。更に、⑤「認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進」においては、まさに認知症カフェを通じて、行われようとしていることともいえる。このようにみると、認知症診療においても認知症ケアにおいても認知症カフェが重要な役割を担うであろうことが推測される。

* Hajime Takechi: Professor, Department of Geriatrics and Cognitive Disorders, Fujita Health University School of Medicine

- ① 認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進
- ② 認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供
- ③ 若年性認知症施策の強化
- ④ 認知症の人の介護者への支援
- ⑤ 認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進
- ⑥ 認知症の予防法、診断法、治療法、リハビリテーションモデル、介護モデル等の研究開発及びその成果の普及の推進
- ⑦ 認知症の人やその家族の視点の重視

図1 認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）7つの柱

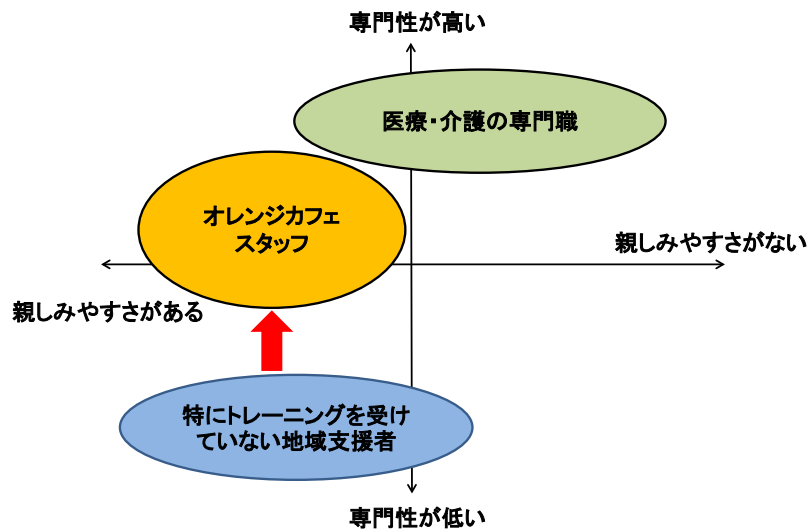


図2 認知症カフェのスタッフ像や支援者の役割分担

認知症カフェの意義

実際、認知症カフェは、2013年頃には全国で30か所程度であったと推測されるが、2016年9月に公表された集計では全国2,253か所と激増している。認知症カフェの源流は、1997年、オランダのベレ・ミーセンがアルツハイマーカフェを開始したことにたどることができる。病院や施設、役所などではなく、「カフェ」という「くつろいだ雰囲気の中で」認知症にかかわる経験を様々な立場の人が分かち合うことが大事ではないかという提案がニーズにマッチし、世界中に広まっていったと考えられる。その実際については、アルツハイマーカフェ、メモリーカフェの開設の手引きとして、その意図や方法が紹介されている³⁾。

私たちも2012年の4月から認知症カフェ開催の計画を開始し、同年9月にカフェをオープンした。カフェをオープンしてすぐにこのカフェがもたらす効果を実感した。それは、病院の診療とも介護保険サービスの利用とも異なるものであった。認知症の人は、その場で、共通の病気を持つ人同士の連帯感や心強さを感じ、

認知症の人の家族も同じ立場同士で日常生活の中で生じる様々なことを共感し工夫を分かちあえることや、専門職とも気軽に相談できることにカフェの良さを見出していた。市民ボランティアにとっても、単に座学で認知症について学ぶだけではなく、実際に認知症の人やその家族と触れ合うことで、理解が向上していた。更に、専門職にとっても、医療機関や介護施設ではなく、生活の場で、認知症の人や家族と接することで多くの新たなことを学ぶきっかけとなる場所であった⁴⁾。

おわりに～今後への課題～

しかし、認知症カフェを超高齢社会の地域資源として根付かせるためには課題も少なくない。財源やスタッフ教育の問題が最も大きいであろう。医療・介護の専門職をカフェ運営に専従してもらうことはマンパワーの面でも経費の点でも難しいことが予想される。一方で、認知症という専門的な教育を必要とする疾患のケアを市民ボランティアに委ねることも困難が予想される。そこで、両者が協力することと専門職が市民ボ

ランティアに適切な教育を行うことが求められる。これらは簡単なことではないが、不可能なことでもないことを2つのカフェの運営に直接かかわった経験から得てきた(図2)⁵⁾。日本が超高齢社会において認知症という疾患と共存していくためには、このようなアプローチが重要であると考えている。

参考文献

- 1) 室伏君士：痴呆老人への対応と介護. 東京：金剛出版；1998
- 2) エスピン - アンデルセン：アンデルセン、福祉を語る一女性・子ども・高齢者. 東京：NTT 出版；2008

- 3) 武地 一：認知症カフェハンドブック. 京都：クリエイツかもがわ；2015
- 4) 武地 一：【認知症と地域連携】 認知症地域連携における認知症カフェの役割. 日本老年医学会雑誌 2015, 52(2):147-152
- 5) 武地 一：ようこそ、認知症カフェへ. 京都：ミネルヴァ書房；2017

この論文は、平成29年7月29日(土)第31回老年期認知症研究会で発表された内容です。